

(社)日本詩人クラブ例会・イベント 2010年1月

2010 平成22年 1月 新年会

担当理事：船木俱子・鈴切幸子

日 時 平成22年1月9日（土）午後3時より

会 場 東京大学駒場Iキャンパス ファカルティハウス・セミナールーム

TEL 03（5790）5931

渋谷駅より京王井の頭線・駒場東大前東口下車 徒歩2分

会 費 4000円



比留間一成会長のご挨拶



新入会員・会友の紹介。100名近い参加者を得て、今年もにぎやかにスタートしました。

2010 平成22年年 2月 例会

担当理事：原田道子

日 時 2月13日（土）午後2時～4時30分

場 所 東京大学駒場Iキャンパス ファカルティハウス セミナールーム

TEL 03（5790）5931

渋谷駅より京王井の頭線・駒場東大前東口下車 徒歩2分

参加費 会員・会友：無料 一般：500円

内 容

(1) 朗読



清水弘子氏



光富いくや氏

(2) 小講演「イメージと時空の交点」



講師：星 善博氏

詩を書くにあたって、私たちはそれぞれ独自に「イメージの形象化」を試みます。また、そこには、書き手の置かれた千差万別の「状況＝時空」が関わってきます。大局的な見地に立てば、詩は、これら二つの要

件が交わるところで生みだされていると言ってもいいでしょう。

詩が独自性を持つためには、書き手がこうした交点を明確に意識する必要があるように思います。その意識の上に「方法論」は成り立つのではないのでしょうか。

今回は、この「交点」というのがどういうものなのか、参考として、拙作を俎上に載せつつ考えていきます。

星 善博（ほし・よしひろ）氏のプロフィール

1958年、栃木県今市市（現、日光市）生まれ。國學院大学文学部卒。2005年、詩集『水葬の森』で日本詩人クラブ新人賞受賞。朗読活動も行い、「村野四郎生誕100年の集い」「メキシコ詩人を囲む会」「朴龍喆生誕100周年記念」など様々な催しに参加。2008年、日本詩人クラブ新人賞選考委員。昨年、「詩と思想」誌上で詩集評を担当。現在、春日部共栄中学高等学校教諭。

(3) 講演「オクタビオ・パスと日本」
－「奥の細道」の翻訳をめぐって－



講師：林屋永吉氏 コーディネーター：細野豊

講演要項

I私とメキシコ

2度の勤務（1952年3月末～1955年10月）

（1968年10月～1975年3月）

初めての印象 在留邦人と一般市民について

対米感情との比較

在外事務所の任務 大使館開設準備と兼任カリブ海、中米諸国との外交関係復活

メキシコ外務省の協力

IIオクタビオ・パスとの出会い 1945年3月

彼のひととなり、略歴、学生時代、スペイン旅行、孤独の迷宮（1950）、本省国際機関局次長としての付き合い、国連加盟問題、日本文広報への協力、浮世絵展（1954年7月 I N B A）、“日本文学について”講演、

日墨文化協定（1954年10月）示唆、メキシコ絵画展の開催支援

III 「奥の細道」の翻訳

翻訳の経緯 初版（1957年メキシコ国立自治大学）まで

改訂版（1970年 バラール社）

“閑かさや”の句をめぐっての応酬 蕪村の俳画

記念版（1992年10月 バンコーメル 新東通信社）

記念版複製版（2002年 リマ、ペルー）

現代文字版（2005年 フォンド・デ・クルトゥラ・エコノミカ）

IV おわりに

講師プロフィール

林屋永吉（はやしや えいきち）

1919（大正8）年、京都府宇治市生まれ。1941（昭和16）年、大阪外国語学校スペイン語科卒業。同年外務省へ入省し、同省から派遣されてスペイン国サラマンカ大学へ留学し、1946（昭和21）年3月まで滞在。戦後はメキシコ大使館、在アルゼンチン大使館に勤務にしたが、在メキシコ大使館勤務の〔1952（昭和27）年から1955（昭和30）年〕頃に、メキシコ外務省の職員であったオクタビオ・パスとの共同作業により「奥の細道」のスペイン語訳が進められ、1957（昭和32）年にメキシコ国立大学から出版された。

1968（昭和43）年12月から1975（昭和50）年1月にかけては、在メキシコ大使館参事官・公使として活躍。1975（昭和50）年3月から1984（昭和59）年9月にかけては、情報文化局国内広報課長・外務参事官、駐ボリビア国特命全権大使、駐スペイン国特命全権大使を歴任した。現在は上智大学イベロアメリカ研究所名誉所員。スペイン国立アカデミー終身会員。

著書は、○Sends de Oku（奥の細道スペイン語訳 オクタビオ・パスと共訳）1957メキシコ国立大学、○ポポル・ヴフ（マヤ神話邦訳）1961中央公論社、○コロンブス、四回の航海の記録（邦訳）大航海時代叢書第一巻 1965 岩波書店、○コロンブス第一回航海日誌（邦訳）岩波文庫 1977 ほか多数。



会場風景：冷たい雨の一日でしたが、80名を超える皆さまにおいでいただきました。ありがとうございました。

2010年 3月 現代詩研究会

担当理事：三田 洋

日 時 3月27日(土) 午後2時～5時

場 所 東京大学駒場Iキャンパス 18号館4F コラボレーションルーム1

TEL 03(5465)8760

渋谷駅より京王井の頭線・駒場東大前東口下車 徒歩2分

参加費 会員・会友：無料 一般：500円

内 容

講演「夢幻、詩、絵 夢にまで現れる狂気の画家、リチャード・ダッドをめぐる」



講師：小柳玲子氏

詩や絵画や書物を愛し、埋もれた天才を愛し、発掘に心をくたく小柳氏の世界には現実とイリュージョンとの間の怪しい美や魅力に溢れています。詩人や画家との出会いと思い。その天然ともいえるユーモアから滲み出すほのかな無常のかおり——画集や資料を拝見しながら、春の午後、小柳ワールドに浸りましょう。

■リチャード・ダッド＝ロマン派の画家として、その才能を期待されながら、26歳のとき、父親を悪魔と思い込み刺殺。以後、一生を刑務所で過しながら、絵筆を離さなかった。

小柳玲子氏の詩から

埋もれた天才を偏愛する私

私は数年の間、ここで静かに、忙しく、心をこめて画集作りに励んできた。埋もれた天才を偏愛する私は、オーストリアからリトアニア、ベルギー、ドイツと、さまざまな国の画家を掘りおこすため、燃えるように生きてきてしまった。「夏至」より(詩集『西に住むひと』)

あなたは水たまりだった

ふるいものたちの中からあなたがやってくる
あなたはとても見分けにくい
時に理科室専用のあのくらい鍵束に似ている

夜 街は月光に洗い出され
倉庫の鉄扉まであかるかった
電柱のかげで人も小さい動物たちもいくどか月光にむせて佇んだ
(中略)

あなたにはいつもさだかな理由というものがなかったので
茫々とした私の校庭であなたは水たまりだった こおろぎだった 『月夜の仕事』より

夕方は好かないな 変なものがやってくるし
喫茶店のずっと向こうの廊下を長い影法師が歩いていく
夕方なのだ きっと
夕方は好かないな
変なものがやってくるし
いろいろなことが信じられなくなる
夜の次が朝だとか
弟はいつも私より小さくて 何年たってもやっぱり弟だなんてことも
それってほんとに怪しいことだ
木椅子の一つにはやっぱりあれがきている
カマスの顔をしたもので 影法師の一族だ
「理由(わけ)を訊かないでください」ときまってしまう だれも訊いていやしない
「夏至」(詩集『為永さんの庭』)より

■小柳玲子氏プロフィール■

東京生まれ。青山学院大学で学ぶ。1980年『叔母さんの家』地球賞、1990年『黄昏のうさぎ』日本詩人クラブ賞、2008年『夜の小さな標』現代詩人賞。詩のほか美術書の編集に携わる。アトリエ夢人館を主宰し美術選書夢人館シリーズ『フンデルワッサー』『長谷川燐二郎』など企画発行。『月夜の仕事』花神社1983年、『雲ヶ丘伝説』思潮社1993年、『為永さんの庭』花神社2004年、『サンチョ・パンサの行方』詩学社2004年、『ちょっと、詩』詩学社2006年などがある。



会場風景。肌寒い日でしたが40名もの方にお集まりいただきました。ありがとうございました。

2009年度 詩の学校 「詩の作法を高める」 ー初心者からベテランまでー
 詩の好きな方ならどなたでも。お誘い合わせてご参加ください (先着20名)

※終了しました

- 会期：2009年10月～2010年3月 毎月第3木曜日 18:00～20:00
- 会場：一般社団法人 日本詩人クラブ事務所 (図はこちらをご参照ください)
- 参加費：前期 (3回) 6,000円、後期 (3回) 6,000円、全講受講10,000円 (学生は半額)

日 程	講 師	内 容
前 期	10月15日 (木) 開講式、山田直校長ほか	中村不二夫 ほか
	11月19日 (木)	同 上
	12月17日 (木)	同 上
後 期	1月21日 (木)	禿 慶子 ほか
	2月18日 (木)	同 上
	3月18日 (木) 閉講式、山田直校長ほか	同 上

〈講師プロフィール〉

中村不二夫：日本詩人クラブ元会長、日本詩人クラブ理事、詩集「Mets」 (日本詩人クラブ新人賞受賞) 他多数
 禿 慶子 (かむろけいこ)：横浜詩人会元会長、日本文藝家協会会員、詩集「彼岸人 (あのひと)」 (横浜詩人会賞受賞) 他多数

- お申込は中村吾郎理事、または浅見洋子、大掛史子、方喰あい子 各専門委員へ。
 メール zvc05352@nifty.com でも受け付けています。

2010 平成22年年 2月 例会

担当理事：原田道子

日 時 3月13日 (土) 午後2時～5時

場 所 東京大学駒場Iキャンパス ファカルティハウス セミナールーム

TEL 03 (5790) 5931

渋谷駅より京王井の頭線・駒場東大前東口下車 徒歩2分

参加費 会員・会友：無料 一般：500円

内 容

(1) 朗読



塚本敏雄氏



峯尾博子氏

(2) 小講演「月と詩と私」



講師：房内はるみ氏

私にとって詩を書くということは、心の浄化作用のように思います。
憎しみや猜疑心の固まりの中では、詩は生まれません。人を許せて、はじめて世界が見えてくるように思われます。

詩と出会って自分に素直になれ、また心の奥深くを見つめられるようになったと思います。ことばが活着しているかどうかは、その人がどれだけぎりぎりのところで活着しているかということではないでしょうか。苦しい場所へ自分を追いつめ、そこから聞こえて声が、ほんとうの声のような気がします。

そのような声を、自然の中にいて感じるがあります。

講師プロフィール

房内はるみ（ふさうち・はるみ）

1956年、群馬県前橋市生まれ。明治大学文学部卒。「詩学」新人推薦。2003年、現代詩加美未来縄文賞受賞。2008年、詩集『水のように母とあるいた』で第7回詩と創造賞（主催 書肆青樹社）受賞。他に詩集『フルーツ村の夕ぐれ』、エッセイ集『庭の成長』。（「地球」「AUBE」「きょうは詩人」を経て、）現在「この場所」「裳」同人。個人誌「ライラック」。

(3) 講演「私と詩とのあい」



講師：司 修氏

講演要項

私が初めて詩に触れた時

——詩というものが何か何も知らず読んで感じたこと

ルドンのリトグラフを見て感じたこと

——まだ詩というものが何か知らなかった

私が初めて出会った詩人とは

——詩人ではなかった

私が初めて詩人であると自認する詩人に出会った時

——彼のいうとおり詩人であった　しかし私の思う詩人ではなかった

俗っぽい画家と思っていた人が真の詩人であったこと

——それは蕪村だった

私がなぜいまさら蕪村を感じるのかということ

——俗に生きた人だから

俗とは何かということ

—— ？

以上が私のお話する内容です。個人的な体験を語ります。

講師プロフィール

司　修（つかさ・おさむ）

1936年　群馬県前橋市に生まれる。私生児であった。父はいなかった。男のような母に育てられた。

1945年　前橋市は空襲罹災して80%が焼けた。焼け野原は私の原風景だと思ふようになった。

中卒。看板店などを転々として、17歳ごろから絵を描くようになる。

23歳。私は初めて詩を読んだ。以後その影響を受け続けて絵を描いている。



会場風景：強風の日でしたが、70名を超える皆さまにおいでいただきました。ありがとうございました。

2010 平成22年 4月 三賞贈呈式

日 時 2010年4月10日(土) 午後2時より

場 所 日本出版クラブ会館

東京都新宿区袋町6 Tel:03-3267-6111

都営大江戸線「牛込神楽坂駅」A-2出口より 徒歩約2分

J R 「飯田橋駅」西口より 徒歩約8分

地下鉄有楽町線 「飯田橋駅」B3出口より 徒歩約7分

地下鉄南北線 「飯田橋駅」B3出口より 徒歩約7分

地下鉄東西線 「神楽坂駅」神楽坂口より 徒歩約7分

会 費 贈呈式：無料

記念パーティー：8,000円

贈呈式次第 司会 中村吾郎・浅見洋子

1. 開会の言葉 中村不二夫理事
2. 会長挨拶 比留間一成会長（細野理事長代行）
3. 経過報告 細野豊理事長
4. 選考経過
第43回日本詩人クラブ賞 禿慶子選考委員長
第20回日本詩人クラブ新人賞 新延拳選考委員長
第10回日本詩人クラブ詩界賞 石原武選考委員長



5. 賞の贈呈 比留間一成会長（細野理事長代行）
第43回日本詩人クラブ賞 詩集『水の声』 裕 杏子氏
第20回日本詩人クラブ新人賞 詩集『来訪者』 伊与部恭子氏

詩集『真夜中のパルス』 倉本侑未子氏

第10回日本詩人クラブ詩界賞 編訳『神への問い』 川中子義勝氏

6. 受賞者の紹介

裕 杏子氏 について 橋浦洋志氏

伊与部恭子氏について 草野信子氏

倉本侑未子氏について 山川久三氏

川中子義勝氏について 森田 進氏

——休憩（10分）——

7. 受賞詩集から詩作品朗読

詩集『水の声』から 裕 杏子氏

詩集『来訪者』から 伊与部恭子氏

詩集『真夜中のパルス』から 倉本侑未子氏

8. 花束贈呈

9. 祝電披露

10. 受賞者挨拶

第43回日本詩人クラブ賞



裕 杏子氏（詩集『水の声』）

第20回日本詩人クラブ新人賞



伊与部恭子氏（詩集『来訪者』）

第20回日本詩人クラブ新人賞



倉本侑未子氏（詩集『真夜中のパルス』）

第10回日本詩人クラブ詩界賞



川中子義勝氏（編訳『神への問い』）

11. 閉会の言葉 中原道夫理事

*総参加者130名、記念パーティーにも100名近い方がご参加くださりました。ご出席いただいた皆さま、ありがとうございました！

第17回 関西大会

日 時 5月8日(土) 受付13時00分～ 開会13時30分

会 場 大阪市「ホテルアウヰーナ大阪」

近鉄線上六駅から徒歩3分 地下鉄谷町9丁目駅から徒歩8分

〒543-0031 大阪市天王寺区石ヶ辻町19番12号 電話06-6772-1441

<http://www.awina-osaka.com/> ←地図はこちらをご参照ください。

参加費 会員・会友・後援団体会員500円 一般1,000円

申込み、問合せ先 横田英子理事

主な内容

●第1部

開会の言葉・会長挨拶・理事長報告など

今年度日本詩人クラブ賞・同新人賞受賞者の詩の朗読

講演「大阪の都市格はなぜ低下したのかー再び含羞都市へー」木津川 計氏

小講演「私の青春時代の大阪」志賀英夫氏

●第2部

晶子まんだら「君死に給うことなかれ」他群読を中心に

蔭山辰子・香山雅代・河井洋・神田さよ・佐藤勝太・下村和子・辻下和美・永井ますみ・名古きよえ・原圭治・ますおかやよい・横田英子



スピーチと自作詩朗読 おしだとしこ・黒羽由紀子・斎藤征義・進一男・瀬崎祐・玉川佑香・村山精二

懇親会 17時50分～19時40分 会費7,000円 同会場ホール

宿 泊「ホテルアウィーナ大阪」シングル6,400円 ツイン1人6,300円

*110名ほどの方にご参加いただき、盛会のうちに終わることができました。

翌日のバスツアー 堺市内 与謝野晶子碑、晶子文芸館、千利休生家跡、仁徳陵古墳跡等々
ホテルアウィーナ大阪前9時出発 新大阪駅着16時頃予定 参加費5,000円（昼食代を含む）



写真の仁徳陵古墳跡前での記念撮影直前。50名近い皆様にご参加いただきました。ありがとうございました。

共催 関西詩人協会

実行委員長横田英子 実行委員27名

2010 平成22年 6月 第61回総会

日 時 2010年6月12日(土) 午後2時～5時

場 所 東京大学駒場Iキャンパス ファカルティハウス セミナールーム
(正門から入って左奥の建物)

TEL 03 (5790) 5931

渋谷駅より京王井の頭線・駒場東大前東口下車 徒歩2分



100名近い出席者を得、活発な議論のもと、理事会提案議題はすべて原案通り可決されました。

懇親会 終了後、同所にて。会費：4,000円



新入会員の紹介、遠隔地からおいでいただいた会員の紹介などもあり、なごやかな懇親会でした。

2010 平成22年 7月 例会

日 時 2010年7月10日(土) 午後2時～5時

場 所 東京大学駒場Iキャンパス ファカルティハウス セミナールーム
(正門から入って左奥の建物)

TEL 03 (5790) 5931

渋谷駅より京王井の頭線・駒場東大前東口下車 徒歩2分

参加費 会員・会友：無料 一般：500円

内 容

1. 会員による朗読



田中健太郎氏



渡ひろこ氏

2. 小講演 外国語をかじる



講師：南原充士氏

言葉は生まれたときから無意識に付き合ってきた家族のような存在ですが、よく見ると顔もかたちも性格も見知らぬところがあって驚きます。

言葉はとても優しい半面とても怖いものなので、まるで人間そのものと双子みたいです。

わたしは、若い頃からなぜか言葉にとらわれ詩の世界に迷い込み、今なお迷路を歩き続けているような気がします。

グローバル化が進む現代社会において外国や外国人さらに外国語の存在も無視できなくなっています。詩においても外国語の詩は大きな栄養源であると思います。

新体詩以来外国から多くを学んできたわけですが、できれば原語で、または翻訳を通じて異質の発想や言葉に接することの意義は今でも大きいと思います。

本日は、外国語初心者レベルながら、いくつかの外国語をかじってみて感じたことを自分の詩への思いとからめて少々お話したいと思います。

講師プロフィール

・南原充士（なんばら・じゅうし）

昭和24年（1949）、茨城県常陸太田市生まれ、日立市育ち。東京大学法学部卒。現在、詩誌「SPACE」「repure」に参加。詩集に、「散歩道」「レクイエム」「エスの海」「個体から類へ涙液をにじませる focus のずらしかた・ほか」「笑顔の法則」「花開く GENE」「タイムマシン幻想」。

3. 講演 方言が亡びるとき——龍馬の言葉が亡びるとき



講師：小松弘愛氏

上記のタイトルは、水村美苗氏の『日本語が亡びるとき』（筑摩書房）に倣ったものです。この著書には「英語の世紀の中で」というサブタイトルが付けられています。再びこれに倣った言い方を許していただければ、私の場合は「共通語の世紀の中で」ということになります。

共通語が日本列島の隅々まで普及してゆくのに反比例して、方言はしだいに衰退してゆくことになりました。坂本龍馬たちが使っていた土佐の言葉は生き残れるでしょうか。一昨年、高知県出身の直木賞作家坂東眞砂子氏は、切り捨てられる地方の現状に立って、「やっちゃれ、やっちゃれ！ ——高知独立宣言」という小説を高知新聞に連載しました。私は、独立が実現すれば土佐の言葉は方言でなくなり、「国語」と呼ばれるものになるけれど、などと思いながらこの小説を読んだことでした。

ともあれ、こういう状況の中で「方言詩」と言われるジャンルをどのように考えたらよいでしょうか。難しいところへ来ていると思います。私は昨年11月『のうがええ電車 続・土佐方言の語彙をめぐって』（花神社）という詩集を出しました。普通の方言詩とは違って、土佐方言の語彙を一篇一篇の題に据えて、あとは基本的には共通語で書いてゆくという手法をとっています。こういう方法も、現状では考えてもよい一つの試みだと思っています。

講師プロフィール

・小松弘愛（こまつ・ひろよし）

1934年高知県生まれ。1967年、林嗣夫と同人誌「発言」を創刊。1972年、「兆」と改題、現在145号。他に所属していた詩誌は「開花期」（片岡文雄編集）、「火牛」（鎗田清太郎編集）。詩集は『狂泉物語』（混沌社・第31回H氏賞）、『幻の船』（花神社）、『どこが偽者めいた』（花神社・第29回日本詩人クラブ賞）、『「びっと」は“bit” 土佐方言の語彙をめぐって』（花神社）、日本現代詩文庫44『小松弘愛詩集』（土曜美術社出版販売）他。



会場風景。70名を超える皆さまにおいでいただきました。ありがとうございました。

(社)日本詩人クラブ例会・イベント 2010年8月

2010 平成22年 7月～8月 第15回詩書画展

担当理事：金子秀夫

日 時 7月26日(月)～8月1日(日) AM11:00～PM6:30 最終日はPM2:00まで

場 所 地球堂ギャラリー

東京都中央区銀座8-8-6 銀栄ビル2F TEL 03-3572-4811

朗読会 7月31日(土) PM3:00～PM4:30 同所にて

入場料 無料

出品会員

特別コーナー【秋谷 豊、天彦五男、笈 楨二】

秋本カズ子、秋元 炯、浅見洋子、伊藤雄一郎、諫川正臣、今泉協子、植木肖太郎、鵜飼千代子、岡野絵里子、奥沢 拓、小沢千恵、方喰あい子、勝野郁子、金子秀夫、川端律子、北岡淳子、くろこようこ、琴 天音、ささきひろし、志賀アヤノ、清水 茂、鈴木豊志夫、鈴切幸子、関 和郎、関 中子、宗美津子、田中眞由美、竹内美智代、中井ひさ子、中田紀子、中谷 俊、名古きよえ、中村吾郎、中原道夫、南原充土、中村不二夫、長谷川忍、早藤 猛、原田道子、林 柚維、羽切美代子、萩野洋子、花籠梯子、比留間一成、比留間美代子、昼間初美、福田美鈴、船木俱子、保高一夫、保坂登志子、細野 豊、堀内みちこ、増田朱躬、まるこるま、向田若子、柳田光紀、山本みち子、吉田ゆき子、渡辺仁子



会場風景 (2010.7.29)

(社)日本詩人クラブ例会・イベント 2010年9月

2010 平成22年 9月 例会

日 時 2010年9月11日(土) 午後2時～5時

場 所 東京大学駒場Iキャンパス ファカルティハウス セミナールーム
(正門から入って左奥の建物)

TEL 03 (5790) 5931

渋谷駅より京王井の頭線・駒場東大前東口下車 徒歩2分

参加費 会員・会友：無料 一般：500円

内 容

1. 会員による朗読

2. 小講演 詩を楽しむために朗読を 講師：庄司 進氏

はじめて、自分の詩を朗読したのは、日本詩人クラブでの新会員紹介の会場でした。それから、詩の朗読をするようになりました。困ったことに、私は吃音の傾向があるため、言葉をとちることが多いのです。詩の朗読をするたびに困ったことを始めたものだと思っています。

詩を書くことや詩を朗読することは自分を表現することです。特に詩の朗読は、何度も読み練習をしたり、声に色をつけたり、顔に表情をつけたりします。人によっては動作を加えたりします。そのこと自体楽しいことです。また、聴く側の反応が目の前にあります。聴く側の反応を感じながら朗読することは、より楽しめる可能性を持っています。しかし、うまくできなかったら悲しい結果もあります。

詩の朗読は、一度黙読してから声にして朗読を始めると、黙読したときとは違った感触が得られることがあります。それは、声にすることによって、その詩についてイメージがはっきりしたり、新しい発見があるからです。

当日は、どうしたら詩の朗読が楽しめるようになるのか、みなさんと一緒に考えたく思います。

講師プロフィール

・庄司 進 (しょうじ すすむ)

1947年(昭和22年)千葉県南房総市和田町生まれ。現在 同人「黒豹」「玄の会」所属。千葉県詩人クラブ理事。詩集に「漁師」「教師」「やせ我慢」

3. 講演 「問い」と「呼びかけ」—宮沢賢治から「詩における人称」の問題まで— 講師：川中子義勝氏

拙書『神への問い』に栄誉ある「日本詩人クラブ詩界賞」をいただきました。これを契機に例会の場で話をするようにということですので、始めにこの本が扱っているテーマについて、なるべく分かりやすくお話ししたいと思います。

拙著の副題に「神義論」という表現を用いました。難しい響きの言葉と感じられるかもしれませんが、それがどんなことを言い表すのかをまずお話ししましょう。ただ、記したことを繰り返

かえすのではなく、日本の詩の流れの中にも同じテーマを見出せるということを述べようと思います。「神への問い」というと、たとえば山村暮鳥や八木重吉という名前が思い浮かぶかもしれませんが。しかし今回は、宮沢賢治の作品にも同じような「問い」をめぐる作品があることの紹介から出発して、彼の作品（例えば作品集『注文の多い料理店』の「水仙月の四日」）がヨーロッパ詩（文学）のひとつの伝統から見ると、どのように映るのかについて考えてみたいと思います。

賢治の作品（例えば「狼森と笹森、盗森」）を読むと、生き生きとした呼びかけや踵動する対話の響きに心がおどります。後半はこのことに注目して、詩における人称の問題にふれたいと思います。人称とは、中学校などで英語の勉強を始めるときに習う、あの一人称、二人称、三人称のことです。外国語を教える営みを生業としていると、そうした外国語の仕組みから日本語や日本文学の成り立ちについて考えさせられます。例えば、「ことば」と「かたち」について、詩と譬えの関わりについて、また文学における応答と出会いについて、近著『詩人イエス——ドイツ文学から見た聖書詩学・序説』（2010）に「二人称の詩学」と述べたことを、こちらにもなるべく分かりやすくお話ししたいと思います。

講師プロフィール

・川中子義勝（かわなごよしかつ）

1951年、埼玉県に生まれる。埼玉大学、マールブルク大学、東京大学で学ぶ。現在、東京大学大学院総合文化研究科（及び教養学部）教授。ドイツ文学・思想史、とりわけ、ヨハン・ゲオルク・ハーマンの研究、紹介に務めてきた。著書として『ハーマンの思想と生涯』（1996）『北の博士・ハーマン』（1996）『北方の博士・ハーマン著作選』（2002）。その貫献によりアマール・エ・フォン・ガリツイン賞受賞（ドイツ1998）。詩書には、詩集『眩しい光』（1995）『ものみな声を』（1999）『ときの薫りに』（2002）『遙かな掌（て）の記憶』（2006）、詩絵本『ふゆごもり』（1996／2006）『ミンナと人形遣い』（2002）、詩エッセイ『散策の小径』（2000）、他がある。共編著に『詩学入門』（2008）。

*70名ほどが参加。おいでいただきありがとうございました。

2010 平成22年 9月 現代詩研究会 9月シンポジウム

若い詩人たちの「いま」 司会：小川英晴氏

パネリスト 岡田ユアン 高岡カ ブリングル御田 渡ひろこ各氏

日時 2010年9月4日(土) 14時～16時30分

会場 東京大学駒場キャンパス18号館4F コラボレーションルーム1 連絡先：090-7241-7021

参加費 会員・会友無料 一般500円

現代詩の書き手の高齢化が指摘されていますが、最近若い詩人たちの活躍も目立ち始めてきました。今回は若い書き手たちに登場してもらい、詩との出会い、詩の概念や思い、先行詩人たちへの関心や疑念、ネット詩などについて話し合い、さらに出席者との対話を通じて相互理

解を深めることができれば幸いです。

パネリスト紹介

岡田ユアンさん 横浜市生まれ。元プロダクトデザイナー、詩集『善良な沈殿物』、「p o c u l a」同人、詩人クラブ会員。

高岡 力さん 東京都生まれ、歯科医、詩集『新型』、「Space」同人、静岡県在住。

ブリングル御田さん 東京都生まれ。詩集『次曲がります』、「モーアシビ」「酒乱」各同人。

渡ひろこさん 東京都生まれ、詩集『メール症候群』福田正夫賞受賞、「馬車」同人詩人クラブ会員、埼玉県在住。

司会 小川英晴さん 東京都生まれ。詩と思想編集委員、詩集・評論集多数、詩人クラブ会員。

■シンポジウムの内容■

●詩との出会い、詩への思い。若い世代から見た現代詩。若い感性の持つ特質や問題点（愛や性について）。同人誌との関わり。ネット詩について。相互批評。先行詩人への関心や疑問。目指すべき方向性や展開。詩壇ジャーナリズムへの関心。出席者との質疑応答など。

●詩の朗読（休憩後、藤吉みわさん）

■パネリストの詩作品（部分）から■

・でんぐり返しをするたびに／新たな誰かとなって／生まれかわり／その土地にあった言葉をもらった 岡田ユアン「問答」より

・ベッドから落下してたどり着けないまま日常にグシャとなる虫だったものを捨ててと妻に言われ妻の箸で摘み便器へ落とした 高岡力「安眠枕」より

・一度産まれた子供を産み直す／険しい山道を行き返す／（中略）もういちど、産みなおし、て／ねえ、おか、あ、さん ブリングル御田「さんどう」より

・誰かが誰かを愛している。／陳腐な歌詞にうすら笑うことさえ許されないような、二重奏のむせ返る空間。（中略）濃密な味が広がり舌が痺れる。／ああ、喉がカラカラだ。／硬質の水、が欲しい。 渡ひろこ「Everybody Loves Somebody」より



左から岡田ユアン・高岡力・ブリングル御田・渡ひろこの各氏



司会：小川英晴氏



朗読する藤吉みわ氏(ギター・佐藤達男氏)

現在活躍中の若い詩人たちが登場し、詩との出会いや思い、自己の詩的世界、同人誌・ネット詩などとの関わりなどについて積極的な討論がなされ、好評でした。出席者は会員外十五名を含む十九名。詳細は詩誌「詩界」に収録予定。

詩界・研究会担当 三田 洋 専門委員 岡田喜代子 木場とし子 中村洋子

2010 平成22年 10月 シンポジウム

担当理事・コーディネータ

ー 原田道子

現代を超えて、〈詩〉の未来を

日 時 2010年10月9日(土) 午後2時～4時30分 (会場を移し継続)

会 場 東京大学駒場Iキャンパス ファカルティハウス・セミナールーム

渋谷駅より京王井の頭線・駒場東大前、東口下車

参加費 会員・会友無料 会員外500円

懇親会 会費3,000円

文化多様性、言語多様性の究極の姿を示唆する『日本語が亡びるとき』水村美苗・筑摩書房)が多くの読者を得ています。このような中で日本語を母語とするわたしたちには、詩を書く意味と現代を超える難しさがどこにあるのか、新たな認識を問われていると考えられます。詩の本質・詩人の本質が、〈詩〉の未来を解く鍵となるのでしょうか。

パネリストプロフィールと詩作品の一部

斎藤恵子氏

岡山県生まれ。企業を経て08年私立高校国語講師。所属「火片」「どうるかまら」、詩集『樹間』、『夕区』、『無月となのはな』(日本詩人クラブ新人賞、晩翠賞)、他。

わたしは鉄条網から出た／明かりのない夜だった／道の先で／青い少女がスカートをひるがえしていた／階上にいるときのように／かなたを見る目をしていた／海がちかくにあるのだと思った 「夕区」から

柴田三吉氏

1952年、東京生まれ。所属「ジャンクション」。詩集『さかさの木』、『わたしを調律する』、『遅刻する時間』、『非、あるいは』、他。

わたしとは 明滅する細胞のあい／だを飛びつづける蜂鳥のようなものらしい。ぶんぶん羽／音を鳴らして心を終え 非へと 跡形もなく消えてしま／う存在なのです。 「非、あるいは」から

中島悦子氏

1961年生まれ。詩集『バンコ・マラガ』、『Orange』、『マッチ売りの偽書』(H氏賞、北陸現代詩人賞)。NHK教育テレビ「ひょうたんからことば」番組委員。放送大学非常勤講師。

その日も哲学者ヘラオは、マッチを売っていた／／俺は、もともとは高貴な生まれで、すぐれた精神活動を行っているのであり／マッチを売って生計を立てているわけじゃない 『マッチ売りの偽書』「序」から

野木京子氏

詩集『銀の惑星その水棲者たち』、『枝と砂』、『ヒムル、割れた野原』。エッセイ集『空を流れる川—ヒロシマ幻視行』(近刊)、他。

声をのみこんでこぼれおちてゆくと／螺旋の源へ戻ってゆく／渦が芽をのぼしはじめるところ／／地表に生きている人の時間／地下に死んでしまった人の時間が／断面にそって並んでいる
「星の表側／斜面の下」から

和合亮一氏

詩集『AFTER』(中原中也賞)、『地球頭脳詩篇』(晩翠賞)、『黄金少年』。『にほんごの話』(谷川俊太郎との対談集)。読売新聞の詩の時評担当。歷程同人。現代の若手詩人の旗頭的存在、他。

草と草 虫と虫 泥と泥 それらの生まれる光と闇とで／詩と死は言葉そのもの 太陽がごろごろと転がると 激／しい音楽 緑色の火炎が山の野原を覆い尽くし 草は踊／り狂うぞ
「ロックンロール」より

2010 平成22年 11月 現代詩研究会

心平ワールドの魅力さをさぐる — 「蛙・富士山・天」の草野心平

講師 深沢忠孝氏(草野心平研究会代表)

日 時：2010年11月27日(土)14時～17時

場 所：東京大学駒場キャンパス18号館4F コラボレーションルーム1

参加費：会員・会友無料 一般500円

18歳、息苦しい家庭から逃れるように中国へ渡り、22歳で帰国後、放浪の生活。高村光太郎や宮澤賢治などとの幅広い交流、アナキズム(戦前)から情動的社会主義(戦後)への変容など波乱万丈の人生……。蛙・富士山・天(宇宙)—そのスケール感溢れる個性的なる魅力的な世界……。生前から身近に接した心平研究の第一人者・深沢氏と共に豊富な資料・原稿・色紙などに触れながら、心平ワールドに浸りましょう。

■講演内容■

「地」と「血」の思想。情動の詩人の草野心平の画然たる戦前・戦後。その生い立ち。中国体験。帰国・焦燥・貧困。高村光太郎と宮澤賢治との関わり。作品「第百階級」「蛙」「絶景」「富士山」「マンモスの牙」「こわれたオルガン」などを巡って。

■深沢忠孝氏プロフィール

福島県生まれ。早稲田大学第一文学部(国文学専修)卒業。教員、都立教育研究所副参事などを経て、大学で詩歌・俳諧研究を担当。詩集として『溶岩台地』(68年・思潮社)、『妣(はは)の国』(74年・地球社)など、評論として『詩人草野心平の世界』(78年、福島中央テレビ)、『草野心平研究序説』(84年)など。現在、草野心平研究会代表として、会誌「草野心平研究」を刊行。



会員外の参加者が12名あり、新鮮な雰囲気のある講演会でした。草野心平と身近に接した講師からの貴重なエピソードの数々、独自の心平像、作品評、心平の自作詩朗読CDなども紹介され好評でした。参加者33名。

詩界・研究会担当 三田 洋 専門委員 岡田喜代子 木場とし子 中村洋子

日本詩人クラブは、1950年5月14日、西條八十を初代理事長に創立され、和暢友愛、詩及び詩学の興隆、国語の醇化、詩の国際交流による平和への貢献を目的に掲げて活動を続け、今年、創立60周年を迎えました。

当初から開かれた詩人団体を目指してきた日本詩人クラブは、2006年7月に有限責任中間法人を設立、2009年5月には一般社団法人に移行し、現在は非営利法人の認定を受けて、例会、研究会、日本詩人クラブ三賞の顕彰、機関誌「詩界」、広報誌「詩界通信」、アンソロジー「日本現代詩選」などの刊行、国際交流、関西大会、地方大会、詩書画展、2007年度からは法人化の趣旨に則り、新たに「詩の学校」を開設するなど、活動の充実を図っています。

創立60周年の節目にあたり、300名を越える皆さまにおいでいただき、お祝いの会を開催しました。

日 時 2010年11月6日(土) 午後1時30分(1時受付)～5時30分

会 場 明治記念館 曙の間(2階)

参加費 500円(資料代)

第1部

(社)日本詩人クラブ会長挨拶	比留間一成
創立60周年記念事業実行委員長挨拶	西岡 光秋
(社)日本詩人クラブ60年の歩み 記念事業担当理事	中村不二夫
各地域の活動を振り返って	
千葉大会(2001年度)	諫川 正臣
仙台大会(2003年度)	前原 正治
宮崎大会(2005年度)	南 邦和
長野大会(2007年度)	倉石 長彦
「詩と平和」の集い・広島(2007年度)	長津功三良
岡山大会(2009年度)	井奥 行彦



日本詩人クラブ会長・比留間一成の挨拶

第2部 「世界から見る源氏物語、物語に見る詩」

講師 東京大学名誉教授、第8回日本詩人クラブ持界賞受賞 藤井貞和



にこやかに講演する藤井貞和氏

第3部 日本現代詩選参加作品朗読

朗読作品の選考について 担当理事 中井ひさ子

選考委員の言葉 選考委員代表 石原 武

朗読 杉谷昭人、鷹取美保子、小松弘愛、日笠芙美子、小寺雄造、金堀則夫、北野一子、宗昇、あさい裕子、入谷寿一の各会員

訳詩朗読（翻訳：拝仙マイケル氏） 熊谷ユリヤ、谷口ちかえ両会員



朗読する受賞者

第4部 日本の歌 瀬川千里と童謡を歌う

出演 瀬川千里 NPO法人童謡文化を広める会理事長 日本歌曲振興会会員
里の秋合唱団



指揮をする瀬川千里氏と里の秋合唱団の皆さん

祝賀パーティ 午後5時45分～7時30分
会場 同会場にて（会費8000円）



会場風景：パーティも200名の方がご参加くださいました。ありがとうございました。

主催 一般社団法人日本詩人クラブ
後援 日本文藝家協会 日本ペンクラブ 日本現代詩歌文学館

2010 平成22年 12月 国際交流ネパール2010・忘年会

(社)日本詩人クラブ創立60周年記念事業／クロージング・セレモニー

深い海の底が世界の屋根となったロマンと神秘の国・ネパールから、そこに暮らすひとびとをこよなく愛し、「人間と自然の詩人」として親しまれているマンジュール氏をお迎えします。

「ネパールが専制君主体制であったとき、自由をもたらすために歌を歌いながら国内各地を、たくさんの人々の心を旅しました。私一人で歌った歌は、仲間の、何十万の歌となりました」というメッセージを届けてくださった氏を囲み、みなさまと共に明日への出発点となる六十周年の最後を飾りたいました。

【国際交流の日】

自然の詩(うた)・生命(いのち)の詩(うた)——ネパールの風を読む 記念パーティ・忘年会

日 時：12月12日(日) 本会議14:00開演、忘年会17:30～

場 所：芝・弥生会館（港区海岸1-10-27 TEL 03-3434-6841）ゆりかもめ竹芝より2分

J R・モノレール浜松町北口および地下鉄大江戸線・浅草線大門B 2から徒歩7分

地図は <http://www.jrhotelgroup.com/hotel/115.htm> をご参照ください。

参加費：会員・会友—無料、会員外—500円 記念パーティ・忘年会—7,000円



プロジェクターを使って講演する芽久・ラジ・シャルマ・マンジュール氏(左)と通訳のモティ・マハルジャン氏



記念パーティー・忘年会ではマンジュール氏のギターに合わせて踊りも飛び出しました

【東京文学散歩】

マンジュール氏と東京下町を歩く——両国・浅草 上方舞鑑賞——谷中・全生庵

日 時：12月11日(土) 集合場所①は博物館に13:00、②は全生庵に17:00

コースと時間：

江戸東京博物館（集合場所① J R両国駅側の動く歩道を降りた江戸東京ひろばのチケットブース前）→浅草寺・仲見世→西日暮里から千代田線で一駅の千駄木駅→谷中の全生庵（集合場所②）で上方舞鑑賞

（千駄木駅団子坂出口でも、ご案内します）

参加費：博物館入館料600円（シニアは300円）

上方舞・会員優待割引2,000円

* 上方舞は、国際派の舞踏家・吉村桂充さんが、マンジュール氏をお迎えして行う催しを組み立ててくださったものです。夕暮れからの燭台を灯した禅寺での艶舞をお楽しみ下さい。